

〔史料〕

# 近世アウクスブルクの医師の日記の邦訳 (1)

〔医師フィリップ・ヘーヒシュテッターの日記〕(1597~1635年)

山本 健

Translation of a German Doctor's Diary  
in Early Modern Augsburg (1)  
— Das Tagebuch des Augsburger Arztes und Stadtphysicus  
Dr. Philipp Hoehstetter, 1579–1635 —

Takeshi YAMAMOTO

The purpose of this paper is to translate a German doctor's diary into Japanese in order to study the mentality of a burgher in early modern Germany. This diary was written by Dr. Philipp Hoehstetter, and was edited by Josef Herz in 1976. This edition was titled *Das Tagebuch des Augsburger und Stadtphysicus Dr. Philipp Hoehstetter 1579–1635*.

The main points in this translation are as follows.

- (1) The Thirty Years' War broke out in Germany at the beginning of the 17th. Century. This war had a bad influence on the daily life of the burgher in Augsburg. Dr. Phillip experienced want of foods and suffered from the rise in the price of foods. Two-thirds of his children ( 10 persons ) died young, of famine.
- (2) He was a Protestant. So he was dismissed many times from medical work in a charity hospital without notice by the Roman Catholic city

council. But when the Swedish troops(the Protestants' troops) advanced to Augsburg, he was reinstated at his old job. Thus the employment and dismissal obviously was caused by the religious conflict between the Roman Catholics and the Protestants in the Augsburg city council.

- (3) In spite of his misfortunes, he raised five children to maturity, and gave them education in writing, arithmetic, dialectic, Latin, sewing and other subjects. His firstborn son became a merchant; his third son, a doctor; and his fourth daughter, a pharmacist's wife.

In this research I examine the Lifecycle and the self-discernment of a burgher's family of Augsburg city around the turn of the 17th century in the future.

## <フィリップ・ヘーヒシュテッターの日記> (1597~1635年)

### 目次

I. はじめに-ヘーヒシュテッター家について

II. 史料について-編者の序言より

III. テキストの邦訳

第1章 ヘーヒシュテッター家の家譜

第2章 フィリップ2世の青少年期

(A) 身内の不幸に関する出来事

(B) 教育・就職関係の履歴

第3章 フィリップ2世の結婚および家族(子ども)について

(A) 婚約と結婚

(B) 15人の子どもの誕生

<以上、本号>

<以下、次号掲載予定、章タイトルは暫定訳>

第4章 アウクスブルク市内外での政治経済状況

第5章	フィリップ2世の妻の親族について
第6章	フィリップ2世の子どもたちへの教育について
第7章	長男の手による補遺
	索引

(注記) ①訳文の〔 〕内の日本語は、理解を容易にするために訳者が補充したものであり、( ) は原語である。

- ② 各章やその小見出しも、同様な趣旨から訳者が書き加えたものである。
- ③ 本文の(注)は一括して末尾に、しかも各章ごとにまとめて記した。
- ④ 原文にない索引(人名、事項そして地名・国名)を本邦訳の7章の末尾に、独立した形式で新たに作成・付記し、掲載分冊番号とページ数を記した。

## I. はじめに一ヘーヒシュテッター家(Die Hoehstetter)について

まず、ここで邦訳しようとする『日記』の著者、フィリップ・ヘーヒシュテッター(Philipp)2世〔1579～1631年〕は、近世都市アウクスブルクで医師を生業とした人物であった。彼の生家、ヘーヒシュテッター家について言及しておく。

同家はアウクスブルク市ではつとに有名な家系であった。それは、エルンスト・ケルンの表現を借りると<sup>1)</sup>、ヘーヒシュテッター家はその繁栄と没落の点で、アウクスブルク市の他のいかなる商人よりも短時間で成し遂げた家系であり、それ故に同時代の人々から注目されていたからである。

同家の起源は、シュタウフェン時代〔1138-1254年〕の、ドナウ河沿いのヘッヒシュタット(Höchststadt am der Donau)〔アウクスブルク市の北西、約36kmに位置〕出身のミニステリアーレス〔家人〕の子孫である、とされている。13世紀末以降には、同家の一部の者たちはアウクスブルク市をはじめとして、その周辺諸都市に居住し、市民として存在していたことも確認されている<sup>2)</sup>。その中で、アウクスブルク市に居住したヘーヒシュテッター家の初期の状態について<sup>3)</sup>、当市の信頼できる史料である「徴

税簿」(Steuerbücher)によると、たとえば1403年には漂白職人(Bleicher)ジークフリート・ヘーヒシュテッター(Siegfried)なる者が税額1.5グルデンを納税する人物として登場している。その息子ウルリヒ4世(Ulrich)〔1390~1453年〕の職業名は1413年版、1418年版そして1422年版の「徴税簿」では仕立屋(Sartor)と記されてはいたが、その仕立屋の内容を詳しく見てみると、衣装の布地をも売る仕立屋(Gewandschneider)であったようで、1422年以降にはこのGewandschneiderという職業名に変更されていた。さらにウルリヒ5世〔1422~1497年〕の代になると、織物と香料を取り扱う大商人としてヴェネツィアのドイツ商館(Fondaco dei Tedeschi)に彼自身の部屋を所有し、さらに1467年版の「徴税簿」では彼の納税者番づけが第18位を占めるまでになっていた。また彼はゴッセムブロート(Gossembrot)商会の共同出資者としてチロル地方の鉱山株の購入と金属取引業にも関与していた<sup>4)</sup>。

しかし、ヘーヒシュテッター家の繁栄を築き上げたのは、ウルリヒ5世の三男で、父の遺産を手にし、卓越した経営手腕を発揮したアムプロジウス1世(Ambrosius)〔1463~1534年〕<sup>5)</sup>であった。彼の子ども時代や徒弟〔商人教育〕時代は不明だが、彼は若くして〔23歳の1486年に〕アウクスブルク市出身の名立たる商人たちに先んじて、最初にアントウェルペン(Antwerpen)に代理店を設置するなど、低地地方との取引関係を強めるという先見性を備えた人物であった。さらに幸運なことに、1488年に太公マキシミアン1世が彼の臣民たるブルッヘ市民たちによって捕捉された時<sup>6)</sup>、彼を慰問し、食料や金銭〔解放の身代金〕を差し入れたのがきっかけとなって、アムプロジウス1世はマキシミアン1世〔その背後に存在するハプスブルク家〕と個人的な関係を結び、経済的特権〔銅鉱山や真鍮鉱山の経営権〕を獲得することに成功した。

このような諸事実から、アムプロジウス1世の経営手腕の特徴を以下の三点に要約できる<sup>7)</sup>。第一に、衣料の原料たる布地をアウクスブルク市周辺市場での調達に満足せず、布地の原産地たるブルッヘやアントウェルペンなどの低地地方で、しかも廉価で調達しようと努めた点、第二に、彼の

経営能力に対して、あらゆる階層から絶大な信頼性があった点である。特にこの点については、同時代の年代記作家クレメンス・ゼンダーの報告によると、

「諸侯、伯、貴族、市民、農民はおろか奉公人〔下男・下女〕たちに至るまで、彼らが所持していた金銭をアムプロジウス1世に出資し、5%の配当金を手にしていた。10グルデン以下の金銭しか所持していない—その金銭をヘーヒシュテッター商会に預けていた—多くの農村奉公人たちは、自分の金銭は安全であり、さらに毎年利益が手元に入る、と考えていた。しかし世間の話によると、アムプロジウスは嘘をついているとのことである。いかなる人も彼が上記の高額な配当金を払っているとは思っていなかった。」<sup>8)</sup>

そうである。

そして第三の特徴は、調達した巨額の資金にものを言わせて、市場を独占し、価格を操作して更なる利益獲得をめざすという手法を駆使していた点である。この点についても、上記の年代記作家ゼンダーの報告によると、

「アムプロジウス1世は商人気質からか、しばしば高額な商品だけでなく、些細な日常生活品をも〔買占め〕、都市の公共福祉や貧民たち〔の生活〕を抑圧していた。〔たとえば〕彼はとねりこの材木を正当な手続きをへて買占め、万が一〔多額な〕儲けをもたらす不正な方法などがあるものならば、〔その不正をも顧みず、売却するために〕市場に運んでいっ〔てしまいそうな人物であっ〕た。また〔商品が〕ワインや穀物の場合でも、同じことをやってしまいそうである。また彼はしばしば商品の本来の価格より高値でその全ての商品を買占め、その商品を購入できない商人たちを追い落としていた。彼は至る所で商品の値をつり上げ、そして自分の思いどおりの値で売却していた。」<sup>9)</sup>

やがてアムプロジウム1世は、このような様々な商品の中から、買占め対象を水銀に定め、1525年にオーストリア大公フェルディナントからイドリア水銀の独占的な販売権を獲得した。さらに、彼は水銀市場の世界的

な独占をもくろみ、新たに発見されたスペインのアルマデン水銀鉱山をも20万グルデンで入手しようとしたが、失敗した。この投機の失敗は同家の財政を傾かせ、1529年に生じる破産の遠因となった<sup>10)</sup>。

さらに破産の直接的な原因について、R.エーレンベルクは、ヘーヒシュテッター家が1528年8月にブリュッセル王室と、ヘルデルン（Geldern）戦役での皇帝側の軍隊〔傭兵〕への支払い資金20万グルデンの用立て契約を取り交わした点に焦点を当てて、次のように記していた<sup>11)</sup>。

ヘーヒシュテッター家は上記の契約を交わすも、すでに手元に現金がなく、そのため保有していた水銀35万700ポンドと辰砂6万670ポンドを王室に提供した。この現物商品の売却を王室から依頼された人物がアントウェルペン在住のラザルス・トゥーヒアー（Lazarus Tucher）であった。彼は、この鉱物〔水銀と辰砂〕を12万6000グルデンでしか売れなかった、と王室側に報告している。王室側は「法外」に安い評価額と気づいてはいたが、差し迫った給料支払いのため、承認してしまう〔王室側の損失額は7万4000グルデン〕。アントウェルペンのある代理商は1528年11月に、

「ラザルスは毎日、ヘーヒシュテッター家の近くに現れては、『同家は自分に対して仲介手数料金としてまだ1400フランドル・ポンドの支払い義務がある』旨を確認していた。それ故に今や、彼に仲介料を支払いたくない同家と裁判沙汰になっている。告発されたラザルスこそがヘーヒシュテッター家を騙し、悪評を立てた人物である。」<sup>12)</sup>

と報告していた。

さらに同代理商は1529年6月に、

「今やラザルスは大変、裕福になった。しかし、その陰で多くのことがさやかれている。宮廷の財政は彼に利益をもたらし、他方〔ヘーヒシュテッター家〕には破産をもたらした。ヘーヒシュテッター家は悪評を立てられ、そのためにここアントウェルペンには二人の社員以外には誰もいなくなった。多くの人々は同家が次の為替〔両替〕業務ができるかどうか心配している。」<sup>13)</sup>

と報告していた。アントウェルペンでは、ラザルス・トゥーヒアーはヘー

ヒシュテッター家を没落させた人物とみなされていた。

ヘーヒシュテッター家は権力者との癒着を前提に経営を行っていたため、政治分野からの負の影響をまともに受けて、すなわち資金的無心を断りきれずに、自らの経営体質を弱体化させる結果となった<sup>14)</sup>。

ところで、このようなアントウェルペンでのヘーヒシュテッター家の悪評は同家の為替〔両替〕書状の信用を失墜させただけでなく、多くの債権者たちの大規模な取り付け騒ぎをアウクスブルクにもたらし〔1528年8月～1529年まで続く〕、短期間で約40万グルデンもの資金が弁済に回された。同家は資産がまだ66万1000グルデンあると自己査定していたが、控え目な評価に従えば、資産は18万グルデンしかなく、さらに確実な資産と呼べるものはさらに少なく、僅かに7万グルデンにすぎなかった。これに対して、負債は支払った分を差し引いても、まだ25万グルデンも残っていた<sup>15)</sup>。

このような厳しい経営状況下の中、1529年に入ると、ヘーヒシュテッター家はこっそりと財産をアウクスブルク市外に運びだし始める。そのため、同年8月9日にアウクスブルク市参事会は同家の3人〔老アンブロジウス、その息子アンブロジウス2世〔1501～1550年〕そしてヨーゼフ・ヘーヒシュテッター〕を逮捕した。法廷では、国王フェルディナントやバイエルン大公ヴィルヘルムの仲介にも係わらず、ヘーヒシュテッター家の破産についての潔白は不十分にしか証明されず、また同家は「いかなる債権者たちにも、裁判での判決が出るまで、支払うことあいまかり成らぬ」という市参事会からの財産保全命令を無視して、勝手に多くの債権者たちに金を支払い、さらには保証を与えるなどしたために、同家に対する信頼は完全になくなってしまった<sup>16)</sup>。

このような状況下で破産は回避できず、長い交渉の結果、1530年2月によく円満な破産整理 (Accord) が成立した。ただし老アンブロジウスは1534年に聖十字架教会の近くの債務拘留獄舎 (Schuldturm) で拘束されたまま死亡し、残りの2人は皇帝の仲介で、1544年によく釈放された。しかしヘーヒシュテッター家が豪商として再興される芽は、アウクスブルク市では完全に摘まれており、皆無であった<sup>17)</sup>。

ヘーヒシュテッター家の流れを汲む一族の中で、老アンブロジウスの息子のヨアヒム1世 (Joachim) [1505～1535年] の家系が新たに、しかも完全に独立した形で存続した<sup>18)</sup>。

すなわち、1527年当時、アントウェルペン代理店の支配人であったと思われるヨアヒム1世はイギリスに渡り、イギリス政府から10年間のイギリスでの輸出入の特権を獲得した。これは、南ドイツの商人として初めての快挙であった。この背景には、ヨアヒム1世が低地地方で逮捕され、さらには投獄させられていたイギリスの商人リチャード・グresham (Richard Gresham) たちの身元引受人となって、グresham家を保護し、これが機縁となり1528年に、リチャードが当時のイギリスで有力な政治家ウォルセイ (Wolsey) にヨアヒム1世を、低地地方で最も裕福な商人の1人であり、またブリュッセル宮廷でも大きな影響力を持つ商人として推薦したことが大きかった。しかし、ヨアヒムとイギリスとの関係を暗転させる事件が起こる。それは、オランダでイギリス [グresham家] への輸出用の穀物を積んだ5～6隻の船が拿捕され、穀物が差し押さえられた事件である。これに対して、グresham家側はヘーヒシュテッター家側の輸出契約の不履行を理由にイギリス産の毛織物の輸出を控え、さらにヘーヒシュテッター家について「破産嫌疑」の悪評を低地地方で流し始めた。ヨアヒム1世はこの悪評を否定しようと1528年7月に渡英するも、グresham家との和解は成らず、イギリスでのヨアヒム1世への信頼は大きく後退した<sup>19)</sup>。

その後 [1528年]、ヨアヒム1世は他のドイツ人と共に、鉱山業の技術を導入しようとしたイギリス国王ヘンリー8世から招待を受け、イギリスでの立場は再び好転したように思われる。彼はイングランド、ウェールズそしてアイルランドにおける王立鉱山の監督長官にして総親方 (Principal Surveyor and Master of the Mines Royal) に任命され、約百人のドイツ人鉱夫の導入などを進言した。ただし、各事業は、残念ながら、ヘーヒシュテッター家の破産 [1529年] の影響で中止になり、ヨアヒム1世自身も低地地方への避難を余儀なくされた。彼は、この後は、デンマーク国王クリスチャンセン2世 (Christian II) に仕え、1535年に死去した<sup>20)</sup>。

ヨアヒム1世がイギリスで残した仕事は、結果的に彼の二男ダニエル (Daniel) [1525～81年] によって、引き継がれる。彼は南ドイツ [ザルツブルク] のヴィーランド (Wieland) 商会に入社し、1541年にイギリスでの同商会の代理商になり、さらに鉱山採掘場の監督になる。さらに1564年に、女王エリザベス1世の登場で、イギリスの湖水 [カンブリア] 地方に銅鉱山の作業場を設置する特許を得、さらに「ハング&ラングナウアー (Hang & Langnauer)」商会の依頼を受けて採掘場の建設を指導した。1568年に彼は「王立鉱山会社」(Society of Mines Royal) を設立し、その経営はケルンテンとチロル両地方の鉱夫と南ドイツの銅鍛冶工に支えられた。ダニエルの死後、その子供が事業を引き継ぎ、事業は17世紀初期まで存続した<sup>21)</sup>。

ヨアヒム1世の長男ヨアヒム2世 [1523～97年] は、商人的な教育を低地地方、フランスそしてイタリアなどで受けた後、伯父のゲオルク1世の商会に入社した。やがて彼はフィリップ・ケーニヒ (Phillip König) と共同で商会を立上げ、また絹とサフランの貿易では、マンリヒ家 (Die Manlich) とザングマイスター家 (Die Zangmeister) との共同経営に乗り出す。しかし、この両家が1586年に破産したため、ヨアヒム2世の商会も連鎖倒産の憂き目に遭った。

アウクスブルク市でのヘーヒシュテッター家の最後の商人は彼の甥のヨハン・マテウス (Johan Matthäus) [1607～1662年] である<sup>22)</sup>。なお、このヨアヒム2世は三度結婚し、『日記』の著者フィリップ・ヘーヒシュテッター2世は父の三度目の妻ヘレーナ・シュタムラー (Helena Stammeler) の二男である。彼は同家出身の最初の医者となり、彼の子孫はネルトリンゲン (Nördlingen) やローテンブルクなどで医師や薬剤師などとなって現在でも活躍している<sup>23)</sup>。

『日記』の邦訳にあたり、ヨーゼフ・ヘルツが編纂した「Das Tagebuch des Augsburger Arztes und Stadtphysicus Dr. Philipp Hoechstetter 1579–1635」<sup>24)</sup> を利用した。

(注)

- 1) Ernst Kern, Studien zur Geschichte des Augsburger Kaufmannshauses der Höchstetter, in: *Archive für Kulturgeschichte*, vol.26, 1936, S.164.
- 2) G.Grünsteudel, G.Hägele u. R.Frankenberger(Hg.), *Augsburger Stadtlexikon*, 2.Auflage, Augsburg 1998, S.503. (以下、ASL.と略記する。)
- 3) E. Kern, op.cit., S.164., Jacob Strieder, *Zur Genesis des modernen Kapitalismus*, Leipzig 1904, S.166–171. なお、Donald J. Harreld, *High Germans in the Low Countries*, Leiden Boston 2004, S.185.をも参照。
- 4) *ASL.*, S.503.
- 5) E. Kern, op.cit., S.165. ff. なお、アンブロジウス1世はヘーヒシュテッター一家の中で最も傑出した人物であった。*ASL.*, S.503–504.
- 6) *Die Croniken der deutschen Städte vom 14. bis ins 16. Jahrhundert, Band 23.*, Augsburg, IV. Bd., Göttingen 1966(1894), S.47. Susanne Wolf, *Die Doppelregierung Kaiser Friedrichs III. und König Maximilians(1486–1493)*, Köln–Weimar–Wien 2005, S.201–210.
- 7) E. Kern, op.cit., S.166–167.
- 8) Die Chronik von Clemens Sender, in: *Die Croniken der deutschen Städte.*, Augsburg, IV. Bd., Göttingen 1966(1894), S.219.
- 9) *ibid.*, S.220.
- 10) E. Kern, op.cit., S.170–177.

さらに、ヘーヒシュテッター家の没落のもう一つの遠因としては次の訴訟事件があった。それは、1517年にレーム家のバルトロメオ(Bartolomeo Rem)がヘーヒシュテッター家とその商會に投資した金の対価(収益金)の支払いをめぐる裁判である。この裁判のポイントを簡潔に記せば、バルトロメオが同商會に900グルデンを投資し、しかも同商會の簿記係として6年間働いた収益金を3万3000グルデンと算出し、要求したのに対して、アンブロジウス1世は2万6000グルデンしか支払おうとせず、その差額をめぐる裁判であった。この裁判で告訴人

のバルトロメオは1524年に獄中死した (*Die Croniken der deutschen Städte Augsburg*, IV. Bd., Göttingen 1966(1894), S.146–149.)。

上記の訴訟箇所の邦訳については、拙稿「ドイツ中世商人の日記の邦訳」(3) (『敬愛大学国際研究』第13号、2004年)、136–137頁を参照。また、このバルトロメオはルーカス・レームから新会社設立の共同出資の誘いを受けていた人物である (拙稿「邦訳 (3)」109頁を参照)。

- 11) Richard Ehrenberg, *Das Zeitalter der Fugger. Geldkapital und Creditverkehr im 16 Jahrhundert*, Bd.1., Jena 1896, S.215–217.
- 12) *ibid.*, S.216.
- 13) *ibid.*, S.216.
- 14) E. Kern, *op.cit.*, S.163.
- 15) R. Ehrenberg, *op.cit.*, S.217.
- 16) E. Kern, *op.cit.*, S.195.
- 17) *ibid.*, S.195、*ASL* „S.504.
- 18) *ASL* „S.504–505. ヨアヒム1世は破産当時、アントウェルペンに滞在していたため、逮捕をまぬがれた。
- 19) E. Kern, *op.cit.*, S.169. なお、ヨアヒム1世がイギリスに輸出しようとした穀物 (小麦) の原産地はバルト海沿岸地方であった (S.179)。
- 20) *ASL* „S.504.
- 21) 鉱山業については、さしあたり、瀬原義生「中世末期・近世初頭のドイツ鉱山業と領邦国家」(『立命館文学』第585号、2004年6月、42～83頁) を、またヨーゼフ・クーリツシャル著、増田四郎監修『ヨーロッパ中世経済史』(東洋経済新報社、1974年) 358–365頁を参照。
- 22) *ASL* „S.504–505. なお、ヨワヒム2世は、これまで、祖父アンブロジーウス1世や父ヨアヒム1世そして弟ダニエルの大胆な経営計画と比べると、地味であるとの評価が定着していた。しかし近年、M.ヘーバーラインはこのヨワヒム2世にこそ、16世紀末から17世紀初頭の新しい商人像 (伝統的な商品取引の分野に忠実に留まり、けして投機的な遠隔地商業や金融業に走らない商人) を、すなわち新しい商人世代の代表者

の性格を見ようとしている。Mark Häberlein, Hatt das glücklich wunderbarlich mit uns spielt. Joachim Hoehstetter d.J. (1523–1597) in der Geschäftswelt des 16. Jahrhunderts, in : *Zeitschrift des Historischen Vereins für Schwaben* , 95.Bd., 2002, S.53–72.

23) *ASL.*, S.505.

24) Josef Herz(hrsg.), Das Tagebuch des Augsburger Arztes und Stadtphysicus Dr. Philipp Hoehstetter 1579–1635, in : *Zeitschrift des Historischen Vereins für Schwaben*, 70.Bd.,1976, S.180–224.

〔付記〕 今回も「クリオの会」（千葉県船橋市東部および薬円台公民館で活動）で2006年4月から毎月1回、発表の場を提供していただき、訳文の分かりにくい箇所などを指摘して戴いた。この場をかりて、お礼申し上げます。

なお「クリオの会」会員は名簿順に、辻和美、夏目智子、入江絢子、鈴木圭子、真野喜代子、小滝洋子、伴野恵美子、現田雅子、宮崎正子、実藤康子、渡辺晴子、鎌田壽夫・順子、山崎富美、中島久美子、下田裕子、直原貴子、溝口瑛子、高村泰子、林ルミ子、山下宏、平方知香子、中村美智子、元川多門、岡田照子、高宮裕子、北澤恵二の27名である（敬称略、2010年4月現在）。

## Ⅱ.史料について

### －「近世アウクスブルクの医師の日記」の編者の序言より－

ここに掲載する医師フィリップ・ヘーヒシュテッター（Philipp Hoehstetter）の『日記』はヘーヒシュテッター家の私的な文庫に所蔵されている。この文庫はその時々同家の長老（Senior）によって、〔たとえば〕現在は、高校の校長職に就いているヴァルター・ヘーヒシュテッター氏によって管理されている。

同『日記』はかなり使い古され、それ故に、〔所々〕破損されている革で覆われた、幅9センチ、厚さ15センチの小冊子に記されている。この冊子は198頁から成るが、そのうちの76頁分は白紙のままである。

筆跡は、確かに、多くの箇所液体などが染み込んだためなのか、あるいは他の原因によるのか褪せてはいるが、おおむね読み易い。しかし判読が困難な箇所も一部ある。〔それは〕全頁にわたり、〔インクを乾燥させるために使用された〕撒き砂の量を惜しんだためなのか、あるいは紙に液体が染み込んだためなのかは不明であるが、裏の頁にまで表の文字が写っていたためである。さらに訂正、省略記号そして本文ならびにその縁に悪文で補遺が記されていたからでもあろう。このために、若干の箇所は不確かで、判読しがたい部分と言われてもしかたがない。

同『日記』には医師フィリップ・ヘーヒシュテッター〔本人〕の他に、さらに2人の人物が加筆していた。その2人とは〔彼の妻と長男である。〕すなわち、彼の妻アンナ・マリアが夫の死と彼ら夫婦の2人の娘〔長女アンナ・マリアと三女ズンナ〕の死―〔具体的には1635年に夫がペストで死亡し、その直後に〔上記の〕2人の娘たちも同様にペストで死亡したこと〕―について記していた。次に〔2人目は、上記の〕2人の娘たちより年上で、商人となった長男マテウスである。彼は1661年の10月〔52歳〕までどうにか生き延びた。

『日記』はその大部分がドイツ語で記されている。〔ただし〕その中の一部分ではあるが、ラテン語、フランス語そしてイタリア語などの外国語が散見される。このような記述様式は、当時の流行であったようである。ところで、彼のドイツ語は当時の、野暮ったく、洗練されていないドイツ語であった。『日記』の筆者が客観的な報告を諦めた箇所や数年間の大変な窮乏〔を体験した〕時期の痛ましい心境が語られている箇所の内容は、創造主たる神への歪んだ喜びを含んでいたため、一定の文学的水準に、例えば、贋金造りの時代（Kipperzeit u. Wipperzeit）の銀貨―金庫や貯金箱の中での一般的な平穏さを飛び出し、贋金造りの行列に加わり、そして最後にはルツボの火の中で異端者として焼かれる銀貨―の原画の水準に達していた。〔まことに〕筆者の辛い心境は、〔阿呆物語を著した〕グリムメルスハウゼン（Grimmelshausen）<sup>1)</sup>のそれを思い起こさせるものであった。

ドイツ語は、筆者が困窮、悲しみ、不正そして蛮行〔残虐さ〕などを介

して体験したすべての恐怖 (Ungeheuerliche) を表現する手段としては、不十分であったように思われる。なぜなら、〔その箇所では〕 筆者は〔ドイツ語よりも〕むしろラテン語で、ないしはラテン語とドイツ語の併用という方法で表現しているからである。ただし〔ラテン語といっても〕特別に気に入った〔文学作品のような〕ラテン語などではなく、〔実用的な〕医学用のラテン語と聖書に記されたラテン語が混じり合ったものである。ただし、この場合でも、聖書からの影響が顕著であったことはいうまでもない。ラテン語の本文にさらなる魅力を与えているのは、『日記』の筆者の言葉遊び〔語呂合わせ〕と比較と比喩への興味であった。

戦争、飢饉、ペストそして宗教的な非寛容さ (Unduldsam) によって生じた不幸に係る叙述は深い感動を与える。さらに、一族に誇りを抱いていた筆者は、彼の祖先と彼が存命中に係わっていた親族そして彼自身および彼の子どもたちの教育、彼が住んでいた家屋、物価、その騰貴〔の実態〕、戦争やその他の政治的事件などについて報告してはいるが、しかし彼が著した医学的著作などについては、驚くべきことに、『日記』の中では〕まったく言及されていない。ただ、「彼は何百、何千という多くの人々を死地から救い出した」 (tot centena, millena hominum mortis faucibus … eripuerat) という〔顕彰の〕辞のみが、アウクスブルク大学医学部の学籍簿の中の彼の業績記載箇所 (Nr.31) に記されているだけである。患者やその症状についても『日記』の中では一言も記されていない。このことは不思議なことであり、また多くの読者、とくに医学史に関心を寄せていた人々を失望させる結果となっている。ただ、この件については、次のように弁解することができよう。すなわち彼の実践〔的な医療行為〕の経験については『治療観察 (Observationes Medicinales)』という三巻からなる著作にまとめ、そして公表していた、と。〔すでに〕『日記』の中で、〔この著作の〕第一巻〔1624年〕と第二巻〔1627年〕が出版されていたことが記されている。また彼が死亡した〔1635年〕に第三巻が上梓され、「大砲が轟き、戦争による混乱と故郷の惨状の中で (in mediis bellorum turbis, inter boatus canonum majorum, in calamitatibus patriae)」<sup>2)</sup>、つまり、

アウクスブルク市が皇帝軍とバイエルン軍に引き渡される直前に、跋文を付けて、全三巻の著作を完成させていた。この第三巻は残りの二巻の改定版と共に『後世の職務 (Pars Posthuma)』という書名がつけられ、また新たに丁付けされて、フランクフルト/ライプツヒにあるローレンツ・ジーギスムント・ケルナー出版社から、著者の甥でローテンブルク市の筆頭医師であるヨハン・フィリップ2世 (Johann Philipp II. Hoechstetter) [1648-1701年] によって [1674年に] 出版された<sup>3)</sup>。この著作は全体で10章から成り、さらに各章でそれぞれ十の事例が取り上げられていたために、著者はこの著作をデカデス (Decades) と呼んでいた。

この非常に重要な医学書が出版されたことで、彼の名は外国でも知られることとなった。彼の筆による、その他の医学論文としては、1603年に彼がパーゼル大学に請求した学位請求論文 (Dissertation) 「洗淨と洗淨行為について (De purgatione et purgant. med.)」を、さらに1604年の研究論文「癲癇について (De epilepsia)」を挙げるができる。最後に、彼は友人で医師であるライムンド・ミンデラー (Raimund Minderer) [1621年に死去] の著書『アロエダリウム (Aloedarium)』に、新たな注釈を加筆した第2版 [の出版] に尽力した。

〔社会活動としては〕アウクスブルク市の医師たちと共に、彼が中心となって医科大 (das Collegium Medicum) が創設される [1582年] 以前の優れた医師たちの、短い伝記と注解を付した〔顕彰〕名簿の編纂に尽力した。医科大の同僚たちの推薦を得て、彼は3回 [1622年、1628年そして1633年]、学部長 (Dekan) に選ばれた。

フィリップ・ヘーヒシュテッターは、アウクスブルク市のヘーヒシュテッター家の二家系、すなわち、仕立屋 (Gewandschneider) と商人 (Kaufmann) 双方の家系の中から初めて医師になった人物であり、同時に同家の後裔から輩出した多くの医師たちの先駆者とも言える存在であった。

彼の息子〔三男〕で、ネルトリンゲン市の筆頭医師となったヨハン・フィリップ1世 [1613~1679年] から、すでに上記した〔ローテンブルク市

の筆頭医師となった]甥のヨハン・フィリップ2世を経て、現代に至るまで、子孫の中から医師を輩出しなかった世代はなかった。

### Ⅲ. 近世アウクスブルクの医師の日記：

『フィリップ・ヘーヒシュテッターの日記』（1579～1635年）の邦訳

#### 第1章 ヘーヒシュテッター家の家譜

私ことフィリップ・ヘーヒシュテッター（Philippus Hoechstetter）は1579年11月17日、午前5時前に生まれた。星座はさそり座（Skorpion）。

私の父親ヨアヒム・ヘーヒシュテッター [2世]（Joahim）は、ヨアヒム・ヘーヒシュテッター [1世] を父親に、アンナ・ランゲンマンテル（Anna Langenmantel）を母親とする [ヘーヒシュテッター家の] 長男として、1523年<sup>4)</sup> 8月21日の午前3時から4時の間に生まれた。星座は山羊座（Steinbock）。父の洗礼立会人は、代夫がレオンハルト・ミュラー（Leonhart Miller）であり、代婦がアンナ・バッツィン（Anna Baetzin）であった。

私の父親ヨアヒム・ヘーヒシュテッター [2世] の弟妹には、まず弟のダニエル（Daniel） [3世] がいる。彼はラーダグンデ・シュタムラー（Radagunde Stammer）と結婚し、そしてイギリスで死亡した。彼の子孫はまだイギリスに存在している。次に妹のエレミアス（Jeremias）。彼女はフランスのマルセイユで独身のまま死亡した。そして最後に下の妹のアンブロジーナ（Ambrosina）。彼女は若くして死亡した。

#### (1) 祖父ヨアヒム・ヘーヒシュテッター1世 [1505～1535年] <sup>5)</sup>

このヨアヒム・ヘーヒシュテッター1世は私の祖父にあたる人物であるが、アンブロジウス・ヘーヒシュテッター1世を父親に、アンナ・レーリンガー（Anna Rehlinger：ヤーコプ・レーリンガーの娘）を母親とする [ヘーヒシュテッター家の] 息子として生まれた。

なお、このアンブロジウス・ヘーヒシュテッター1世はブルクヴァルト

(Burkwald) 城〔アウクスブルク市の北、約14kmに位置〕と同教会の創設者にして建築主であり、さらには貴族の叙爵書 (Adelbrief) をも入手していた。また彼は複数の友人とともに、アウクスブルク市にドミニコ会派の礼拝堂 (Die Cappell zu den Dominicanern od. Predigern in Augsburg) の創設に尽力した。したがって、同礼拝堂はヘーヒシュテッター家の墓地でもあった。

また孫には、ウルリヒ・ヘーヒシュテッター (Ulrich) 〔彼はウルリヒ・ヘーヒシュテッターとN.コーラー (Kolerin) 夫婦の息子である〕やバーバラ・ポイトインガー (Babara Peuttinger) 〔彼女はハンス・ポイトインガーとエリザベータ・ヴァーラウス (Warauss) 夫婦の娘〕などがいる。

## (2) 父親ヨアヒム・ヘーヒシュテッター2世〔1523～97年〕<sup>6)</sup>

### (A) 初婚期〔1555～67年：12年間の結婚生活〕

私の父親ヨアヒム・ヘーヒシュテッター2世は、南・北ドイツ、フランスそしてイタリアで多数の様々な主人に仕えた後、1555年3月7日〔31歳〕にニュルンベルク市でルーカス・シュトラウベ・フォン・ライプツヒ (Lucas Straube von Leizig)<sup>7)</sup> の娘ドロテア (Dorothea) と結婚した。彼はこのドロテアと12年間〔1567年10月27日まで〕生活を共にし、彼女との間に以下の8人の子どもを授かった。

#### (1) アンナ (Anna：長女) - 1557～1629年：享年72歳

＜結婚歴：①1582 - 1589、②1590 - 1622＞

彼女は1557年10月16日、早朝の5時から6時の間に生まれ、1582年2月15日〔24歳〕にカスパール・エッティンガー2世 (Caspar Oettinger der Jung) と結婚した<sup>8)</sup>。夫カスパールはその後ヴェルシュラント〔イタリア〕 (Welschland) で死亡した〔1589年〕。その後、彼女は1590年6月にトビアス・ハーマン (Tobias Hamann)<sup>9)</sup> と再婚した。この後夫は1622年7月28日に死亡した。

<欄外記録：彼女は1629年12月9日の午後9時に静かに息を引きとった。彼女は死亡するまでの18週間の長きにわたり病床にっていた。彼女は神から72年と6週間と4日の寿命を賜ったことになる。>

(2) ヨアヒム3世 (Joachim：長男) - 1559～？

彼は1559年5月12日に生まれた。星座は獅子座 (Leuen)。彼は、噂では、その極悪非道のために捕らえられ、安息を与えられることなく殺されたそうである。

(3) マリア (Maria：次女) - 1560～1582年：享年22歳

彼女は1560年8月25日、夜の6時から7時の間に生まれた。星座はさそり座 (Skorpion)<sup>10)</sup>。しかし彼女は1582年10月25日に死亡した。享年22歳であった。

(4) マグダレーナ (Magdalena：三女) - 1561年 - 夭折

彼女は1561年10月、この世に生を受けたが、僅か7週間で夭折した。

(5) レギーナ (Regina：四女) - 1563～1606年：享年43歳

<結婚歴：1588～1606年>

彼女は1563年1月27日、朝の4時から5時の間に生まれた。星座は魚座 (Fische)。彼女は1588年にジェロニムス・カルトシュミット2世 (Jeronymus Kaltschmid der Jung) と結婚した。彼女は夫よりも早く死亡した。彼女が死亡した日時は1606年5月27日 [土曜日]、朝の9時であった [彼女の結婚生活は18年間]。彼女は12人の子どもを授かったが、そのうち夭折した子どもは僅かに2人 [トビアスとドロテリ] のみであった。

<欄外記録：[彼女が死亡した時] 彼女は43歳であった。>

(6) フィリピーナ (Philippina：五女) - 1564～1635年：享年70歳

<結婚歴：1590～1635年>

彼女は1564年9月29日、夕方5時に生まれ、1590年にエレミアス・ハーマン2世 (Jeremias Hamann der jung)<sup>11)</sup> と結婚した。そして4人の息子と5人の娘を儲けた。そのうち、夭折したのは息子1人と娘1人であった。また1613年に息子ダニエルを、1620年に29歳の息子ジェロニムスを失う。〔また残りの息子〕 ジョルク・ジークムントは出征して戦死した。

<欄外記録：彼女は1635年8月25日にペストに罹り、死亡した。>

(7) ヤコビーナ (Jacobina：六女) - 1566～1626年：享年60歳

<結婚歴：①1589～1604年、 ②1605～1611年>

彼女は1566年1月28日、4時頃に生まれた。星座は牡羊座 (Widder)。彼女は1589年<sup>12)</sup> にノイブルク (Neuburg) にある帝国裁判所の書記官 (Gerichtsschreiber) ヨハネス・ヴァイス (Johanenes Weiss) と結婚した。その後、彼女の夫は1604年に死亡した〔結婚生活15年〕。彼女には3人の息子と1人の娘が残された。

そこで、彼女は〔1605年に〕<sup>13)</sup> 同じ裁判所の書記官アンドレアス・アイフラー (Andreas Eyfler) と再婚し、彼が1611年に熱病で死亡するまでの6年間、アンドレアスと生活を共にした。アンドレアスとの間には子どもは授からなかった<sup>14)</sup>。

<欄外記録：彼女はちょっとした転倒がもとで、1626年3月18日に死亡した。享年60歳と39日であった。>

(8) 第8子 - 1567年： - 死産

この8番目の子は死産であった。この子のみならず、〔産後の肥立ちの良くない〕母親のドロテアも1567年10月27日、9時30分頃に死亡した。

**(B) 再婚期 (1569-72年：2年間の結婚生活)**

私の父親ヨアヒム・ヘーヒシュテッター2世は、1569年6月6日にオイフロジーナ・ガルトナー (Eufrosina Gartner) と再婚した。2人の子どもに恵まれたが、彼女との結婚生活は僅か2年間にすぎなかった。

(1) ダーヴィト (David : 長男) - 1570~71年 (生後10カ月と10日) - 夭折  
彼は1570年12月13日、4時頃に生まれ、〔10カ月後の〕1571年10月23日に死亡した。

(2) スザンナ (Susanna : 長女) - 1572年 - 夭折  
彼女は1572年に生まれたが、3月27日に死亡した。その後、後妻のオイフロジーナも3月29日に死亡した。

### (C) 再々婚期 (1572-83年 : 11年間の結婚生活)

私の父親ヨアヒム・ヘーヒシュテッター2世は、1572年11月3日にヘレーナ・シュタムラー (Helena Stammmler) と3度目の結婚をした。新婦のヘレーナは初婚 (Jungfrau) であった。

＜欄外記録：新婦のヘレーナは1542年3月16日〔木曜日：聖ゲルトルトの日〕、夜の10時45分頃に生まれた。彼女はレオンハルト・シュタムラー (Leonhart)<sup>15)</sup> の娘である。私の父との結婚生活は11年間続き、以下の〔5人の〕子どもに恵まれた。＞

(1) オイフロジーナ (Eufrosina : 長女) - 1574~1612年 : 享年38歳

＜結婚歴：1596~1612年＞

彼女は1574年11月3日〔昼の〕12時から1時の間に生まれた。星座は蟹座 (Kreb)。

彼女は1596年8月にマテウス・ローヴォルフ2世 (Mattheus Rauwolf der Jung)<sup>16)</sup> と結婚した。この夫婦は〔実に〕多くの子どもに恵まれ、そして〔今後も〕なお一層の多くの子どもに恵まれることであろう。

＜欄外記録：妻のオイフロジーナは〔1612年12月7日に〕38歳で死亡した。夫のマテウスは1628年9月27日に死亡した。＞

(2) フィリップ (philipp : 長男) - 1576~78年 : 享年2歳

彼は1576年1月1日、8時から9時の間に生まれた。星座は獅子座。しかし

彼は1578年6月20日に死亡した。

(3) パウロ (Paulus : 次男) - 1578年 - 夭折

彼は1578年4月24日、朝の4時に生まれた。星座はさそり座。しかし彼は〔同年の〕7月20日に死亡した。

(4) フィリップ2世 (Philipp : 三男、同日記の筆者) - 1579~1635年 : 享年56歳

＜結婚歴 : 1596~1635年＞

私は1579年11月17日、朝の5時前に生まれた。星座はさそり座。私の洗礼立会人は、代父がハンス・バティスタ・ヘーヒシュテッター (Hans Battista) であり、代母が主婦 (Frau) マルクス・レム (Marx Rheminn) であった。

＜欄外に記された私の妻の手による記録 : 1635年11月19日、昼の3時頃、私のすばらしい夫は、神によって、あらゆる苦勞と仕事から解放され、天寿を全うした。神は夫にすばらしい復活をお与え下された。夫の遺体は聖シュテファン修道院内にある私の父親クリストフ・シュミット (Christoff Schmidt) の墓に埋葬された。＞

(5) マリア (Maria : 次女) - 1583~1632年 : 享年49歳

＜結婚歴 : ① ? 、 ②1623 - 32年＞

彼女は、1583年1月23日に生まれた。彼女の名前は、今は亡き母親ヘレーナが命名したものである。

＜後代の筆による追記文 : 彼女は1632年8月26日に死亡した。＞

＜欄外記録 : 寡婦となった彼女は〔アウクスブルク市の公証人・フィリップ・〕<sup>17)</sup> アプフェルフェルダール (Apfelvelder) と再婚した。この夫は1632年4月11日に死亡した。＞

## 第2章 フィリップ2世の青少年期

### (A) 身内の不幸に関する出来事

[1583年] 一筆者：3歳 - <母親の死>

私の母親〔ヘレーナ・シュタムラー〕は、次女のマリアを出産して5日後、すなわち、1583年1月28日、4時30分に、産褥〔熱〕のために死亡した。神よ、母に永遠の生命と老いることのない王冠を授けたまえ。アーメン。

<欄外記録：母親は41歳に8週間と4日前に死亡した。>

私の母親の死後、不思議にも、遺族たる子どもと父親の運命は異なるものとなった。すなわち、父親には不幸〔死神〕が取りついた〔1597年に父親が死亡した〕のに対して、私たち子どもには再び神の恩寵が施されたのである。しかも、恩寵を必要とする場合が生じたならば、〔子どもが必要する分量に応じて〕神はそれぞれに恩寵を施したのである。この誠実で全能なる父たる神はその恩寵をもってなおしばらく父親らしく、私たち子どもを支援してくださるであろう。

[1589年] 一筆者：9歳 - <祖母の死>

同年6月13日に私の祖母アンナ・ランゲンマンテル〔祖父ヨアヒム・ヘービシュテッター1世の妻〕が死亡した。その遺体は、プロイガー・シュティーレン（Breuger Stielen）を指揮者とするバプテスマ聖歌隊の吟唱のもとに、聖アンナ教会のランゲンマンテル家の墓に埋葬された。

[1597年] 一筆者：17歳 - <父親の死>

同年10月4日〔土曜日〕、夕方8時に、私の愛しい父親〔ヨアヒム・ヘービシュテッター2世〕が死亡した。その遺体は彼の母親〔アンナ・ランゲンマンテル〕の近くに埋葬された。

<欄外記録：筆者：33歳 - <姉の死> -

1612年12月7日に、私の姉でマテウス・ローヴォルフ2世の妻であるオイ

フロジーナが死亡した。12月10日に、姉の遺体は聖シュテファン女子修道院の墓地に埋葬された。〔埋葬の際、〕聖十字架教区の牧師M.〔ダーヴィド・〕プフィスター（Pfister）<sup>18)</sup>が賛美歌27番を吟唱した。姉の寿命は38歳と5週間であった。>

## （B）教育・就職関係の履歴

〔1589年〕－筆者：9歳

同年7月17日に、私は〔ラテン語の学習のために〕聖アンナ教会のジョイス・マヨーリ（M.Jos.Mayori）の許に預け〔下宿させ〕られる。

〔1591年〕－筆者：11歳

同年4月16日に、私は聖アンナ教会近くの都市貴族（Herr）ダーヴィト・ヘーシェル（David Heschel）の許に預けられる。

〔1597年〕－筆者：17歳

同年3月17日に、私は聖アンナ教会のコレジオ〔大学：Collegium：1582年に創設〕の給費生（Stipendiat）に採用される。

〔1600年〕－筆者：20歳

同年6月12日に、私はアウクスブルク市からバーゼル〔大学〕へ〔医学を〕勉強するために派遣される。

〔1603年〕－筆者：23歳

同年6月16日に、私は〔イタリアの〕パドヴァ〔大学〕へ旅立つ。

〔1604年〕－筆者：24歳

同年9月に再度、バーゼルに戻り、ここバーゼル〔大学〕で11月7/17日に医学博士（Doctor Medicinae）の学位を取得し<sup>19)</sup>、12月6日〔幼児の日：聖ニコラウスの日〕にアウクスブルク市に戻る。

〔1605年〕－筆者：25歳

同年、私はアウクスブルク市の医師登録台帳（*Matricula Medecorum Augustanorum*）に申請した。当時の医科大学の学部長（*Decanus*）は都市貴族（*Herr*）で、医師でもあるヨハン・ウルリヒ・ラムラー（*Joh.Ulrich Rumler*）<sup>20)</sup>であった。

### 第3章 フィリップ2世の結婚および家族（子ども）について

#### (A) 婚約と結婚

〔1606年〕－筆者（新郎）：26歳、新婦：23歳

同年8月3日〔木曜日〕、私はシックス・シュミット（*Six Schmidt*）の館（家）で、クリストフ・シュミット（*Christoph*）の娘（*Junkfrau*）アンナ・マリア・シュミット（*Anna Maria*）とお見合いをし、そしてその日の夜に彼女の家で初めての食事（*semel*）を共にした。その直後の日曜日〔8月6日〕に、上記の都市貴族にして商人であるクリストフ・シュミットの部屋で、婚約（*Hinschweren*）<sup>21)</sup>を取り交わした。

その〔約1カ月〕後の9月11日に、私の結婚式が上記の商人の部屋で挙行された。神から素晴らしい祝福を賜る。〔二人の結婚生活は1606～35年の29年間であった。〕

<私の妻の生誕について>

私の妻アンナ・マリア・シュミットは1582年9月25日〔火曜日〕、昼の1時半に生まれた。星座は山羊座。彼女の洗礼立会人は、代夫がハンス・プリーガー（*Hans Pflieger*）であり、代婦がヨアヒム・ヘーヒシュテッター2世の妻、すなわち、私の母親ヘレーナ・シュタムラーであった。

<私の息子ヨアヒム・マテウスの後記から：

1638年2月7日午後3時頃に、上記の私の最愛なる母親アンナ・マリアが死亡した。享年55歳。>

## (B) 15人の子どもの誕生

[1607年] - 筆者：27歳、妻：24歳

⇒第1子（ヨハネス・マテウス：長男）

同年7月6日 [金曜日]、昼の12時半に、私の愛する妻が初めての子ども [長男] を出産した。この嬰兒は翌日の昼に聖ウルリッヒ教会で洗礼を受け、ヨハネス・マテウス (Johannes Mattheus) と命名された。彼の洗礼立会人は、代夫が都市貴族 (Herr) ヴォルフガング・シュルツァー (Wolfgang Sultzer) であり、代婦が主婦 (Frau) カタリーナ・ハンス・シュメルツァー (Katarina Hans Schmeltzer) であった。星座は射手座 (Himmel des Schutzen)。[月齢] 月曜日で、上弦の月 (das erste Viertel [des Mondes])。神から恩寵と祝福を賜った。

[1608年] - 筆者：28歳、妻：26歳 - 長男1歳

⇒第2子（アンナ・マリア：長女） - 夭折

同年11月8日、午後4時頃か4時15分頃であったろうか、私の愛しい妻が初めての娘を出産した。この子は神から大きな恩寵を賜った。星座はさそり座。そして [月齢] は新月 (Neumond) で11月7日の午後7時頃であった。この児は次の日曜日、すなわち、11月10日の午後に聖アンナ教会で洗礼を受け、アンナ・マリアと命名された。代夫は都市貴族ヴォルフガング・シュルツァー、代婦はカタリーナ・ハンス・シュメルツァーであった。

<1635年の、私の妻の後記から：

1608年11月22日、午前7時半頃に、私の愛しい娘アンナ・マリアが神によりこの惨憺たる現世から召された。生後2週間の命であった。この児は神から喜ばしい復活と永久の命を得る許しを賜った。この児の遺体は聖シュテファン教会の、今は亡き私の父親 [クリストフ・シュミット] の隣の墓に、しかも小さな石の下に、埋葬された。>

〔1610年〕－筆者：30歳、妻：27歳－長男2歳

⇒第3子（フィリピーナ：次女）－夭折

同年3月31日〔水曜日〕、午前5時15分に、私の愛しい妻が次女を出産した。この児は4月1日に、聖アンナ教会で洗礼を受け、フィリピーナ（Philippina）と命名された。代父は義兄弟のトビアス・ハーマン（Tobias Hamann）であり、代母はシビッラ・エブリング（Sybilla Eblingin）であった。神が恩寵を授け下された。星座はかに座。

4月9日〔キリスト受難の日〕の午後4時15分に、私の愛しい娘フィリピーナがこの娑婆から神によって召された。4月11日〔復活祭日〕に、この児は聖アンナ教会に、しかも私の祖母〔アンナ・ランゲンマンテル〕の墓の中に埋葬された。10日間の命であった。彼女は神から喜ばしい復活を賜った。

〔1611年〕－筆者：31歳、妻：28歳－長男：3歳

⇒第4子（ハンス・ヨアヒム：次男）－夭折

同年3月21日〔月曜日〕、夜9時半に、私の妻が次男を出産した。この児は3月23日に聖アンナ教会で洗礼を受け、ハンス・ヨアヒム（Hans Joahim）と命名された。彼の代父は義兄弟のトビアス・ハーマンであり、代母はシビッラ・エブリングである。星座は双子座（Zwillinge）。神から恩寵を賜った。翌12年1月6日、夜9時15分にこの児は死亡し、この悲惨な俗世から去った。遺体は聖アンナ教会の、今は亡き次女（フィリピーナ）の隣に埋葬された。この児は嬉しいことに、神から永久の命を賜った。41週と4日間の寿命であった。

〔1612年〕－筆者：32歳、妻：29歳－長男：4歳

⇒第5子（スザンナ・三女）

同年5月16/26日〔土曜日〕、午後3時15分に、私の愛する妻が三女を出産した。この児は神から恩寵と聖なる魂を賜った。星座は牡羊座。翌日曜日に、聖アンナ教会で夕べの説教後に洗礼を受け、スザンナ（Susana）

と命名された。彼女の代父は義兄弟のトビアス・ハーマンであり、代母はシビッラ・コンラート・エブリングである。〔月齢は〕下弦の月、火曜日であった。

<1635年 私の妻の後記から：

同年11月20日、夕方5時半頃に、私の愛しい娘スザンナが神によりこの悲しい現世から召され、この俗世を去った〔享年23歳〕。スザンナは神から喜ばしき復活と永久の命を賜った。この子の遺体は、聖シュテファン教会の、今は亡き私の父親〔クリストフ・シュミット〕の墓の中に、彼女の愛しい父親〔夫〕によって、埋葬された。私もまもなく子どもたちの許に行くことを神がお許しになりますように。>

〔1613年〕－筆者：33歳、妻：30歳－長男：6歳、三女：1歳

⇒第6子（ヨハン・フィリップ：三男）

同年8月19/29日〔木曜日〕、夕方6時半に、私の最愛の妻が三男を出産した。この児は神から恩寵と聖なる魂を賜った。星座は水瓶座（Wassermans）。〔月齢は〕満月（Bruh：Vollmond）<sup>23）</sup>、金曜日の朝4時。次の土曜日〔8月31日〕に、聖アンナ教会で、夕べの説教後に洗礼を受け、ヨハン・フィリップ（Johann Philipp）と命名された。彼の代父は義兄弟のトビアス・ハーマンであり、代母はシビッラ・コンラート・エブリングである。

〔1615年〕－筆者：35歳、妻：32歳－長男：7歳、三女：2歳、三男：1歳

⇒第7子（トビアス：四男）一夭折

同年5月10/20日〔水曜日〕に、私の愛しい妻が四男を出産した。この児は神から恩寵と聖なる魂を賜った。すなわち、この児は水曜日の早朝4時15分に生まれた。星座は魚座（Fisch）。〔月齢は〕下弦の月、火曜日の夕方直前。この児は5月21日〔木曜日〕に、聖アンナ教会で、朝の説教の後にキリストの聖なる洗礼を受け、トビアス（Tobias）と命名された。彼の代父は義兄弟のトビアス・ハーマンであり、代母はシビッラ・コンラート

ト・エブリングである。

しかし1616年2月1日、夜10時頃に、この幼い四男トビアスは神によってこの娑婆から召され、そして永久の喜びと冥福を授かった。2月3日に、聖アンナ教会の聖堂内陣にある私の祖母〔アンナ・ランゲンマンテル〕の墓の中に埋葬された。この児は神から永久の命を賜った。36週と6日間の寿命であった。

〔1616年〕－筆者：36歳、妻：33歳－長男：8歳、三女：3歳、三男：2歳  
⇒第8子（ジョルク・ウルリヒ：五男）一夭折

同年4月19/29日に、私の愛しい妻が黄疸（Gelbsucht）で容態に変調をきたし病気になったが、しかし同日に嬉しいことに、神の至福により、五男を出産した。同日の夕方4時頃に、この嬰兒は聖アンナ教会で洗礼を受け、ジョルク・ウルリヒ（Jerg Ulrich）と命名された。この児が誕生した時刻は、朝の6時45分であった。星座は天秤座（Waag）。〔月齢は〕満月の2日前であった。なお、この児の出産は予定日より9週間も早い早産であった。神はこの児を、恩寵をもってお救いになり、この新生児に魂〔命〕をお与え下されたのである。彼の代父は義兄弟のトビアス・ハーマンであり、代母はシビツラ・コンラート・エブリングである。〔彼の誕生日は〕金曜日であった。

1617年12月4/14日、昼の1時頃に、この児は神に召され、死に際に神から喜ばしい復活と永久の命を賜った。12月15日に、聖アンナ教会の内陣にある墓にこの児の兄弟姉妹たちと一緒に埋葬された。この幼児の寿命は1年と32週間と6日であった。

〔1617年〕－筆者：37歳、妻：34歳－長男：9歳、三女：5歳、三男：3歳  
五男：1歳

⇒第9子（ヨハネス・バピスタ：六男）

同年6月15/25日午後1時過ぎに、私の愛しい妻は六男を出産した。星座は魚座。日曜日。この嬰兒は6月26日に、聖アンナ教会で洗礼を受け、ヨ

ハネス・バピスタ (Johannes Bapista) と命名された。神はこの児に聖なる魂を良き状態で授け下された。彼の代父は義兄弟のトビアス・ハーマンであり、代母はシビッラ・コンラート・エブリングである。

＜欄外記録：汝は天国で〔父親である〕私に再会できよう。＞

子どもとは命を与えられ、かつ命を召し上げられる運命にあるにちがいない。

夭折した嬰兒は、早くしてこの現世の悲惨さから逃れられて、幸せなり。

嬰兒は〔神がお定めになられた〕良き結末〔死期〕までの寿命なり。〔現世を〕生き抜くこと (Leben) には多くの苦勞と労働が伴うので、夭折した嬰兒は、〔現世の〕不安と苦惱から解放されるなり。

〔1618年 = 30年戦争の開始年〕

－筆者：38歳、妻：36歳－長男：11歳、三女：6歳、三男：5歳  
六男：1歳

⇒第10子 (エレミアス：七男)－夭折

同年10月15/25日夜〔午前〕2時45分に、私の最愛にして大切な妻が七男を出産した。星座は山羊座。木曜日。26日にこの幼児はキリスト〔プロテスタント系〕教会の聖アンナ教会で洗礼を受け、エレミアス (Jeremiasu) と命名された。この児は神から聖なる魂を賜った。彼の代父は義兄弟のトビアス・ハーマンであり、代母はシビッラ・コンラート・エブリングである。

この七男は1619年1月3日〔木曜日〕午後2時半に夭折した。彼はこの悲しい現世を永久の喜び〔の世界〕と交換した。神はこの幼児の死に際して、彼に永久の命を授け下された。10週間と12時間の〔短い〕寿命であった。この児の遺体は彼の兄弟姉妹の近くに埋葬された。

〔1619年〕－筆者：39歳、妻：37歳－長男：12歳、三女：7歳、三男：6歳  
六男：2歳

⇒第11子（ハンス・カール：八男）

同年11月2/12日〔火曜日〕午前10時頃に、私の愛しい妻が、痛みを伴いながらも八男を出産した。星座は山羊座。11月13日には牧師（der Gemein Cristi）がこの児に洗礼を施し、ハンス・カール（Hans Carl）と命名した。彼の代父は義兄弟のトビアス・ハーマンであり、代母はシビッラ・コンラート・エブリングである。この児は神から恩寵と良き魂を賜った。

〔1621年〕－筆者：41歳、妻：38歳－長男：13歳、三女：8歳、三男：7歳  
六男：3歳、八男：1歳

⇒第12子（ヘレーナ：四女）の誕生と第9子（六男）の死亡

同年2月16/26日〔金曜日〕、夜の10時15分に、私の愛しい妻が嬉しいことに四女を出産した。星座は牡羊座。牧師が2月28日〔ヴァイセン・ゾントーク＜Weissen Sonntag：復活祭後の初めての日曜日〕に、この児に洗礼を施した。彼女の代父は義兄弟のトビアス・ハーマンであり、代母はシビッラ・コンラート・エブリングである。神はこの児が敬虔的で、神への信仰心が厚くかつ従順であるようにと、正しい魂を授け下された。この児の名前は、私の愛しい母親〔ヘレーナ・シュタムラー〕にちなんで、私がヘレーナ（Helena）と命名した。

また同年（1621年）、六男のヨハネス・バピスタが炎症熱（Hizig Fieber）のため発病して、11日目のレターレ〔Laetare：四旬節の第4日曜日〕すなわち3月21日の9時45分に、眠るかの如く、安らかに息をひきとった。この子は生まれた日も死亡した日も日曜日であり、〔つくづく〕日曜日に縁のある児であった。神の子にして、我らの主であるイエス・キリストが日曜日に復活なされ、私たちと私の息子〔六男〕のために、天国への扉をお開きになられたのである。すなわち、私の息子はあの死亡した日に、主イエス・キリストからこの大いなる喜び〔たる天国へのキップ〕を賜ったのである。彼の遺体は聖アンナ教会の、彼の4人の兄弟と1人の姉の墓近くに埋葬された。3年と9カ月の寿命であった。

[1622年] - 筆者：42歳、妻：39歳 - 長男：15歳、三女：10歳、三男：8歳  
八男：2歳、四女：1歳

⇒第13子（オイフロジーナ：五女）

同年8月14/24日 [水曜日]、夜まさに10時にならんとする時刻に、私の愛しい妻が五女を出産した。星座は牡羊座。8月26日 [金曜日]、朝の説教の後に、この児は牧師から洗礼を施され、オイフロジーナ (Euphrosina) と命名された。彼女の代父は義兄弟のトビアス・ハーマンであり、代母はシビッラ・コンラート・エブリングである。この児は全能なる神から聖なる、そして善良なる魂を賜った。神が、この現世の、苦しく、辛くそして哀れむべき時代において、私たちやこの幼児を慰め元気づけ、そしてこの幼児を永久の喜びと栄光にお導きくださりますように。万事が痛ましい (Omnia sunt deploranda)。

[1623年] - 筆者：43歳、妻：40歳 - 長男：16歳、三女：11歳、三男：9歳  
八男：3歳、四女：2歳

⇒第13子（五女）の死去と

第14子（ヨハネス・クリストフォルス：九男）一夭折

同年7月21日（金曜日）、夜の9時過ぎに、五女のオイフロジーナが安らかに息をひきとった。この児がこの日に、この世のものとも思われたい、あらん限りの喜びを伴って復活しますように。父なる神がこの幼児をこの哀れむべき時代 [現世] にお遣わしになるように命じたのと [同じくらいの] あらん限りの恩寵と慈悲をもって、再び、この幼児を死に至らしめ、かつ神の許へとお召しになられたのであった。この幼児は47週間の [短い] 寿命であった。彼女の遺体は聖アンナ教会の、彼女の兄弟姉妹の近く [の墓] に埋葬された。

<後記：注意 (Nota Bene) のこと。

母親は分娩時に、次第に白パンを現金でも購入できず、食べることができなかった。[当時は] そのような [食料の確保が困難な] 時代であった。>

また同年〔1623年〕12月6／16日真夜中の1時半直前に、私の妻が〔41歳で〕九男を出産した。この嬰兒の出産は予定日より4週間も早かった。この早産は、妻の腹の中にいた子どもの容態が悪化したことや、11月17日に妻の身体に生じた原因不明の出血、さらに毎日夕方になると定期的に生じた〔異常〕出血などが原因と思われる。このため、やがて、神は特別な御意思からか、守護天使に嬰兒への栄養を減らさせ、また嬰兒に泣き声を上げさせ、そして10週間かそこらでマタイの声〔受胎／妊娠〕の予兆を知らせて、この嬰兒を〔出産予定日より〕かなり早い日時にこの惨めな現世へ遣わしなされたのである。小さくて、弱々しい命であった。〔誕生すると〕すぐに、すなわち、教会での夕べの説教の後にこの児に洗礼が施され、ヨハネス・クリストフォルス（Johannes Christophorus）と命名された。星座は天秤座。〔月齢は〕下弦の月。この新生児は全能なる神から魂と恩寵を賜った。この児の代父はトビアス・ハーマンであり、代母はシビッラ・コンラート・エブリングである。しかし今回〔の代母〕に関しては、彼女に代わって、マリア・エラミアス・シュミット（Maria Jeramias Schmidin）が務めた。

1622年11月28日に、老代父たるトビアス・ハーマンが―〔彼には私の11人の子どもたちが洗礼立会人の件でお世話になった。〕―死亡した。

本当に小さく、そしてあまりにも早く生まれてきたこの嬰兒〔九男〕は、ただこの現世で生活しただけでなく、〔むしろ〕この現世の苦悩を味わうために生まれてきたのかもしれない。つまり、この児は創造主たる神によってやがて再び〔神の御許に〕召され、そして〔現世とは〕異なる、より良き世界へと導かれるのである。この出来事〔夭折〕は12月17日、夜の12時に、すなわちこの嬰兒が誕生して〔僅か〕3日目の夜のことであった。彼の寿命は45時間と30分〔約2日弱〕であった。神はこの児と私たち全員を、喜ばしい復活と永久の命の扉へとお導き下された。正しい魂は神の手の中にあり、そしていかなる苦悩も神の手には届かない。〔それ故に〕キ

リストの審判によって、この児は無辜と判定され、今や〔天国へ導かれる者として〕神の手の中に加えられるであろう。彼の遺体は聖アンナ教会の兄弟姉妹の近くに埋葬された。

〔1627年〕－筆者：47歳、妻：44歳－長男：19歳、三女：15歳、三男：13歳  
八男：7歳、四女：6歳

⇒第15子（ヨハネス・バプティスタ：十男）－夭折

同年6月13/23日〔水曜日〕午前9時半直前に、私の愛しい妻が、嬉しいことに、十男を出産した。星座はさそり座。6月25日〔金曜日〕の早朝に、キリスト教会で洗礼を受けた。彼の代父はマテウス・シュミット・ツウ・ヴェネディヒ（Matheus Schmiedt zu Venedig）―〈今回は彼の代わりに、彼の弟のエレミアス・シュミット（Jeremias）が務めた〉―とマテウス・ローヴォルフ2世（Matteus Rauhwurf der jung）であり、代母はシビッラ・コンラート・エプリングである。この児はヨハネス・バプティスタ（Johannes Baptista）と命名され、全能なる神から彼の生活と仕事（Werk）のために、神の善良にして聖なる魂を賜った。

しかし〔1628年〕5月18日〔木曜日〕の3時から4時の間に、上記のヨハネスは多くの苦難に耐えた後、安らかに眠るかのように死去した。神の復活が起りますように。彼の遺体は聖アンナ教会の内陣に埋葬された。47週間と1日の寿命であった。

＜ラテン語による欄外記録、：ヨハネス・バプティスタは死によって、この〔現世の〕惨めな時代を永遠なる至福に換えた。＞

以下、次号掲載を予定